

Y11a 「市民科学」で読み解く諏訪天文同好会の100年

大西浩次（国立長野高専）、陶山徹（長野市立博物館）、大西拓一郎（国立国語研究所）、渡辺真由子（茅野市総合博物館）、早川尚志（名古屋大学）、野澤聡（獨協大学）、衣笠健三（国立天文台野辺山）、長野県天文文化研究会、「長野県は宇宙県」連絡協議会ほか

「市民科学によって天文文化はいかに誕生し、何を生み出してきたか」という問いを出発点として、設立100年を迎える日本最古の市民天文同好会の一つである諏訪天文同好会を対象に調査研究を進めている。「市民科学」とは、日本では、以前、社会課題の解決における「市民の手による科学」を指していたが、最近では、1990年代より欧米で発展してきたCitizen Science（シチズンサイエンス）の日本語訳として、市民の参加による学問への寄与を含む広範囲の科学的活動を指すようになってきた。一方、初期の「市民科学」は、eBirdやGalaxy Zooの様に、職業科学者によって企画されたプラットフォームに、市民がデータ収集などのアウトソーシングとして参加する形態であった（Bonney, et al 2009）。しかし、近年のICTの発展やオープンサイエンス・オープンデータの流れを受けて、従来の「市民科学」の枠を超えた活動も始まろうとしている。このような状況を受けて、本研究では、長野県における天文同好会、花山天文台や東京天文台との交流、1957-1958年の市民によるオーロラ観測網（Hayakawa et al. 2021 DOI: 10.1002/GDJ3.140）、県内での天文教育普及活動などの事例を通して、過去の「市民科学」のプロトタイプについて考察を加える。更に、このような長野県の過去の伝統が現在の「長野県は宇宙県」への活動に至る過程を調査する事で、日本の天文文化史について、市民団体の寄与という目線から俯瞰を試みる。これらを通じて、これからの「市民科学」のあり方を考える具体的モデルを提示できると期待している。また、宇宙県の活動を進めていく中で、この新たな市民科学モデルの有効性を実証していく。